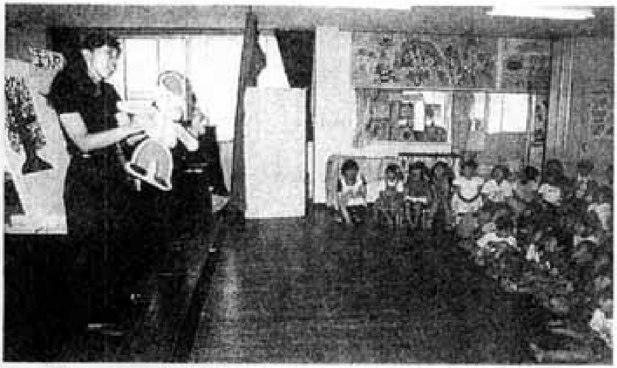
朝日新聞
朝日新聞大阪本社

紙人形で巡回公演

「ミュージックシアター ピクニック」快調

松山の主婦3人



園児らに紙人形劇を見せる「ピクニック」のメンバー＝松山市宮久町で

松山市内で手作りの紙人形を使って幼稚園や保育園を「巡回公演」している主婦のグループがある。「ミュージックシアター ピクニック」で、松山市桑原八丁目、松木紀子さん([illegible])、同市東野三丁目、山内紫さん([illegible])、同市井門町西一丁目、越智山香里さん([illegible])の三人が一年前から始めた。きっかけは同じ幼稚園に通う子供たちに、母親として自分たちで何か楽しい劇を見せてやりたいと考えたことだった。一年たち、活動はようやく軌道に乗り、オリジナルなストーリーをつくり、宣伝もして、松山市内に限られていた公演活動の範囲を広げていくと考えた。

活動の範囲拡大へ

演者と観客とかけ合いも

六月十七日に松山市宮久町の宮久保育園で公演があった。この日の演題の一つは「おばあちゃんからのプレゼント」。誕生日の孫にプレゼントを届けに行くおばあさんの話。もう一つは「森の小さな帽子屋さん」。森にある帽子屋さんにいろいろな動物がやって来て自分に似合った帽子を買っていくという話。両方ともピアノをひき、歌を交ぜながら話を進めていく。

劇は「見る方」と「演じる方」というようにはっきりと分かれてはいけない。話しかける方が見る方に呼びかけ、共に歌い、共に劇をつくっていく。

子供たちも劇が進むにつれ、そんな手法に引き込まれていく。「この帽子似合うかしら」とアヒルがつぶやくと、園児たちは「似合う！　似合う！」とかけ声。品切れの帽子屋にリスが来ると「もうないよお」。劇は両方あわせて一時間ほど。全員で主題歌の合唱をして終わった。

松木さんと山内さんは以前幼稚園や小学校で先生をしていた。その時からこうした劇を子供たちに見せてあげたいと思っていたという。しかし先生をしながらではとても練習したり道具を作ったりする時間は取れず、あきらめていた。その後、先生をやめ自分の子供たちも小学校にあがって子育てが一段落したのを機会に越智さんを誘って「ピクニック」を旗揚げした。

最初はピアノとせりふが合わなかったり、「かけだしの悲劇」のようにせりふもぎこちなかったという。ただ家族や知人は好意的で、段ボールで小道具をつくったり、公演先をあっせんしてくれたりといろいろな面で助けてくれた。

なかでもメンバーの子供たちは最大の協力者であり批判者でもある。登場人物のデザインや原作へのアレンジの加え方などその都度相談しては感想を聞き、修正する。ある時、公演に連れてきていた子供が本番中に「これは僕の人形だからみんなに見せちゃいやだ」と人形に抱きつき困ったこともあった。

代表の松木さんは「夢中になって見てくれる子供たちが一番励みになります。そんな素直な感性を成長期になっても忘れてほしくないなと思います」と話している。

子供たちに楽しさを